

川崎病冠動脈閉塞例の長期予後

(分担研究：川崎病のサーベイランスに関する研究)

秋場伴晴、芳川正流、中里 満、鈴木 浩
佐藤 哲、佐藤哲雄

要約： 川崎病罹患後に冠動脈閉塞をきたした9例の予後について検討した。1例は広範な心筋梗塞を起こし死亡した。2例は閉塞側と反対側の冠動脈に狭窄が出現しA-Cバイパス術を施行した。6例は閉塞の診断から平均4年10か月が経過しているが、内科的に観察中である。冠動脈閉塞例に対しては負荷心筋シンチグラムを定期的実施して虚血性病変の早期発見に努める必要がある。

見出し語： 川崎病、冠動脈閉塞、冠動脈造影、負荷心筋シンチグラム、生活管理

川崎病の心後遺症として冠動脈瘤が知られているが、経過とともに退縮するものがある反面、閉塞性病変へ進展していく場合もある。後者においては心筋梗塞などの虚血性心疾患をきたし生命にもかかわってくるため、厳重な経過観察が必要である。我々は冠動脈閉塞をきたした川崎病9例を経験したのでその後の経過についてまとめ、管理上の留意点について考察する。

県で発生した1,222例の川崎病のうち冠動脈閉塞の診断がなされた9例である。全例男性で、川崎病発症時の年齢は3か月から11歳11か月、平均3歳2か月であった。発症から閉塞診断までの期間は1か月から9年10か月、平均3年6か月で、2例が心筋梗塞、7例が冠動脈造影で診断された。また、1例は造影診断の約1年前から運動時の狭心痛がみられた。

対象および方法

対象は1977年から1991年までに山形

成績

症例毎の経時的な冠動脈造影所見を

山形大学医学部小児科

Department of Pediatrics, Yamagata University School of Medicine

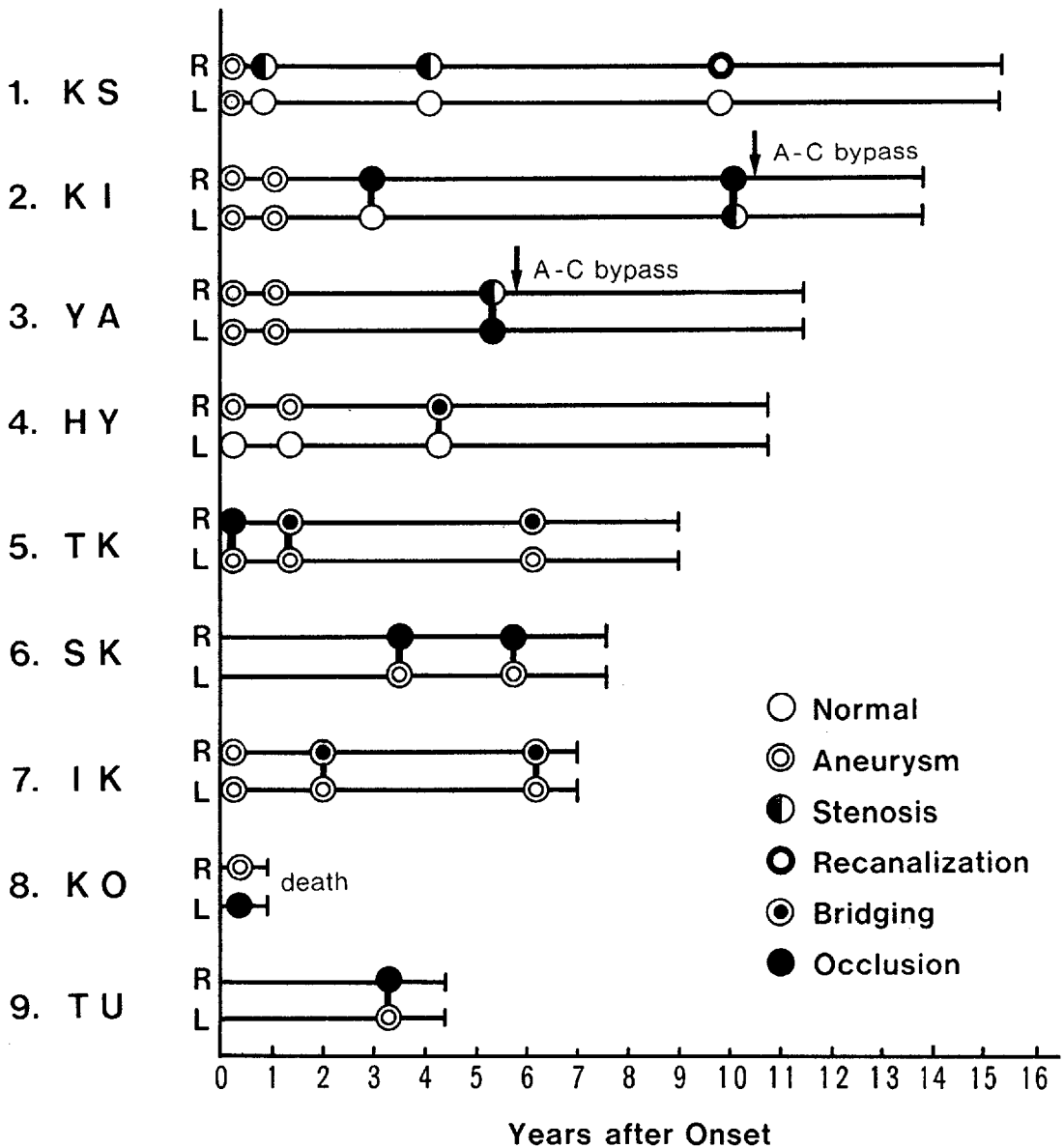


図 川崎病冠動脈閉塞例の経時的な冠動脈造影所見

図に示した。症例8は生後11か月に発症し、1か月半後に心筋梗塞を起こした。冠動脈造影で左前下行枝が閉塞し

ており、発症から約6か月後に心不全で死亡した。症例5は11歳11か月に発症し、2か月後に心筋梗塞をきたした

が、冠動脈造影で右冠動脈が閉塞していた。1年3か月後の再造影で閉塞部位を橋渡している(bridging)血管により末梢が造影された。症例2は発症から3年後の造影で右冠動脈が閉塞し、10年3か月後にはさらに左冠動脈に狭窄が出現した。症例3は5年5か月後の造影で左冠動脈の閉塞と右冠動脈に狭窄を認めたが、この約1年前から運動時の狭心痛がみられた。症例2と3ではA-Cバイパス術を施行した。症例6と9はいずれも右冠動脈が閉塞しており、最終造影では再疎通は認めていない。また、対側の左冠動脈には動脈瘤が残存していた。いずれも左右の冠動脈間には副側血行路が発達しており、右冠動脈の末梢を還流していた。症例7は右冠動脈が閉塞後にbridging arteryが発達し末梢を還流していたが、左冠動脈には動脈瘤が残存していた。症例1と4は右冠動脈が閉塞後に再疎通あるいはbridgingをきたしたが、左冠動脈は正常であった。

負荷心筋シンチグラムを症例1から7に1~2年に1度施行した。最終検査時の所見では、症例1、2、3、5および6でlow perfusionを示す部位が認められた。

薬剤は症例1、6および7で塩酸チクロピジン、症例2は硫酸イソソルピドとジピリダモール、症例5と9はアスピリンとジピリダモールを投与していた。

症例7までの就学児の生活管理指導区分は、症例1と6がD、症例4がE(可)、その他はE(禁)であった。

考察

自験例9例の冠動脈閉塞をきたした川崎病の予後は、1例が死亡し、2例はA-Cバイパスの適応となった。その他の6例が現在内科的に管理しているが、冠動脈が閉塞したままで、反対側の冠動脈に瘤が残っている症例6と9、さらに、閉塞後にbridgingはみられるものの同様に反対側に冠動脈瘤がある症例5と7では嚴重な経過観察が必要であろう。

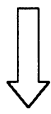
閉塞例の薬剤投与に関しては一定の見解がない。動脈瘤が併存している例では抗血栓療法は必要であろうが、症例1や4の場合に薬剤を投与すべきかは不明である。我々は症例4には薬剤を投与していない。

川崎病による冠動脈閉塞性病変の管理指導区分はC~Eとされているが、個々の症例毎に主治医の判断に任されているのが実情である。我々は主に負荷心筋シンチグラムの所見を参考に決定しているが、過度の運動制限とならないようにしている。

冠動脈閉塞をきたした川崎病の長期予後に関しては未だ十分に解明されていないが、負荷心筋シンチグラムなどを定期的に施行して虚血性心筋病変の早期発見に努める必要があろう。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:川崎病罹患後に冠動脈閉塞をきたした 9 例の予後について検討した。1 例は広範な心筋梗塞を起こし死亡した。2 例は閉塞側と反対側の冠動脈に狭窄が出現し A-C バイパス術を施行した。6 例は閉塞の診断から平均 4 年 10 か月が経過しているが、内科的に観察中である。冠動脈閉塞例に対しては負荷心筋シンチグラムを定期的を実施して虚血性病変の早期発見に努める必要がある。